

# 拒んだ女性、男児を出産

札幌市の小山内美智子さん(64)は、10代だった1970年ごろ、不妊手術を受けさせられそうになった経験を持つ。脳性まひで体に障害があり、いまは、札幌市で障害者の自立支援活動に携わるNPO法人「札幌いちご会」理事長を務めている。

「生理が来ないように子宮を取る手術に行こうね」ある日、母親に言われ、出かけることになった。だが、痛いわけでもないのになぜおなかを切らなければならぬのか……。疑問も感じていた。

タクシーに乗り込んだとたん、「とんでもないことをしようとしている」と感じた。おしりをすらすらうにして車から出た。道路に座り込んで「やっぱり行か

ない」と訴えた。それを見た母親は「母さんが間違ってた。行くのはやめよう」と言っただけだった。その後、母親がその話に触れることは一切なかった。旧優生保護法に基づく手術だったかどうか、今は知るすべもない。

生理が来ると、手が不自由な小山内さんはうまく処理できず、生理用ナプキンを3枚重ねたり、学校を休んだりすることもあった。自分でも子宮を取ったほうがいいと思った時期もある。24、25歳のとき、同じ

年頃の障害のある女友達から、泣きながら「子どもを産まないようにした」と打ち明けられた。「障害者は子どもを産んじやいけないだ」と思った。

その後、同じような障害

がありながら出産、社会で活動している年上の女性との出会いもあり、小山内さんは30歳で結婚。翌年に長男を産んだ。妊娠が分かったときはうれしくてたまらなかったが、周囲からは「大丈夫?」「どうやって育てるの?」と言われた。

出産直前、「もし子どもが障害を持って生まれたら、『それ見たことか』と言われるのではないか」。

そんな恐怖にもとらわれた。元氣な男の赤ちゃんが生まれ、当時は「たとえ障害があっても、私の生き方

を通して育てようと思っていた」と振り返る。

今回の道の発表で明らかになった件数以外にも、表面に出ないまま手術が行われた例は多かったのではないかと小山内さんは推し量る。「自分から言い表せない人もいるし、仮に声をあげたら施設などにいられなくなる場合もある。周囲が見守り、受け入れる社会にしていかなければ」

(芳垣文字)

## 「障害があっても、受け入れる社会に」



「札幌いちご会」理事長の小山内美智子さん  
札幌市西区

私の大好きな小説に、「銀河英雄伝説」という本があります。

その中には銀河帝国という国があり、皇帝が絶対的な力を持っているのですが、(ちよと設定がスターウォーズに似てますが…(笑))その皇帝が「優性遺伝子保護法」という法律を作りますが、それは優秀な遺

伝子だけを残すために、障害のある人を殺したり、堕胎させたりするというものでした。

小説の中で皇帝の残虐性を表す一つのエピソードなのですが、実はこれと似たような法律が日本にあったということも私は最近初めて知りました。

本人には何も知らされないうちに、10代で不妊手術を強制された人がたくさんいて、北海道では全国最多とされているそうです。

人間は本能的におそろしいことができてしまうんだなあ…。



購入  
絵画  
日本画  
掛軸  
洋画  
美術品  
田島美術店  
台東区上野  
1-10-9  
03(3831)6890